

く」といふ文を組立てさせて後、讀本の文にすゝむがよい。動物の體色は生存競争の結果としてあらはれた生物界の現象であるが、自然物の關係は決して孤立を許さぬ。すべて有機的關係によつて、生を全うし得るものなる事を知らせなければならぬ。「保護色」「警戒色」は學術上の専門語である。正確なる語義を付することをつとめなければならぬ。

地理的教材

地理に關するものには「利根川」「箱根山」「日光山」がある。「利根川」はその流域を調べることによつて、關東平野の大部分の地理的現象を明かにし、川と交通、川と産業等に説き及ぼすことが目的である。この材料を取扱つては、兒童の日常生活に關係深き河流について、利根川にて得たる智識を應用せしめなければならぬ。「箱根山」は自然の轉變と世の轉變をあはせ叙したもので、複雑なる火山の模型である。「日光山」は自然の美に人工の美を加へたがために、かく名高くなつたことを知らせなければならぬ。これまた兒童の日常生活範圍に於て、自然の轉變の明かなる土地、人工の美によつてあらはれたる土地を觀察せしめ、この課の意義を身にかけて解せしめなければならぬ。

人情美をあらはした材料

人情の美をあらはした課には、「水兵の母」と「駱駝乗」と「競馬」とがある。「水兵の母」は「國民の敵愾心」の最高潮を示したもので、母が一人の子に、國のため君のために名譽の戦死せん事を迫る悲壯の事實である。「駱駝乗」は父子の情の至極な所で、互に思ひきづかふ至情のうるはしさを知らせなければならぬ。この記事中母は文の最初にあらはれただけであるが、母の苦心もあはせ説かなければならぬ。「競馬」は競争者の危難を救つた男らしい行爲で、敵を愛する所に人情のうるはしい閃が見える。「水兵の母」では母の手紙が最も重要な箇所、之を解するがために前後の記事が出てをるのである。「駱駝乗」は父を思ふ心の力に、夜

中テントをのがれ出たアリの危険を思はせなければならぬ。漠々たる沙漠の暗夜に、まよひ出でたるアリの心には、たゞ父の姿が見えて、彼を守つてゐたのである。「競馬」では熊吉の落馬と共に、愛作の心頭にかゝやき出でた慈悲の光明を、たしかに認めさせなければならぬ。

汽船・汽車の發明

汽船・汽車の發明はアメリカのフルトンとイギリスのステブソンとである。現今世界の文明國では、汽船・汽車の恩澤に浴してゐない所はあるまい。みな發明家フルトン・ステブソンの賜である。しかしセイヌ河に於ける汽船の初航海に、乗船希望者が十二人であつたこと、ステブソンの汽車と徒歩又は馬上で競争しようとしたことは、フルトン・ステブソンに對して少くとも敬意を缺いた所爲である。すべて發明家は社會から決して厚遇せられるものではない。成功の後には大に之を稱揚するが、その道中にある間は、輕侮嘲笑の無禮をさへ加へる。薄志弱行の徒は多くこれにおちて、發明の大功を收め得ないのである。教授者は發明家たらんとして失敗したる人々の功績をも認めなければならぬ。

説明文

「養生」「空氣」「貯金」「貨幣」等については、文章の表面にあらはれた意義を明かに會得せしむるは勿論、自己の生活中に存在する事實を之にあて、之と結びつけて解せしむる事が大切である。「養生」の課の最終段に、「飲食に注意し、身體の清潔を保ち、適度の運動を怠らず、早く寝ね、早く起き、新しき空氣をすひ、常に日光に浴して、なほ病にかゝらば、是我が罪にあらず」といふ「人事を盡して天命をまつ」との安心がほのめかしてある。取扱上特に注意しなければならぬ。人の身體は單に之を物質と考へると、まことにあさましいものだが、精神の修養によつて、養生の實をあげ得る場合は極めて多い。この課は餘りに物質におもくして、精神に輕いかと思ふ。「空氣」の課では「是我等の周圍に空氣のあればなり。」「燈の火の風に吹き消



さるゝが如きはなり。「オルガンにて美しき音を發せしむるが如き、唐箕の車をまはしてもみとしひなどをあふぎ分くるが如き皆然り。」といふのである。「是」といひ、「是なり」といひ、「皆然り」といふ。すべてこの文の前には必ず一の斷定がある。もし之がない時には、この語は用をなさぬ。この點特に取扱を要する所である。貨幣の課の「今ノ文明諸國ノ貨幣ニハ主トシテ金銀ヲ用フ。是金銀ハ價高ク、保存スルニモ都合ヨク又分合スルコトモタヤスクシテ、分合ノ爲ニ直段ノ割合ヲ變ズルコトナク、産地異ナリトモ、成分ニ異同ナクシテ、直段ノ變動モ少キ等、貨幣トスルニ最モ便利ナレバナリ。」といふ所、形式が極めて複雑である。取扱上注意しなければならぬ。

「我が陸軍」昔の旅「靖國神社」いづれも説明文であるが、別に取扱上の重要問題はない。たゞ靖國神社の終にある「誰かは義勇奉公の心を起さざらん。」といふ反語は、こゝが新出である。之を取扱ふには、「義勇奉公の心を起さざらん。」として意義を付し、之に「誰かは」を付して、反語となる次第を知らせるのが大切である。

候文

候文は九の巻から出てをる。最初が「註文狀」である。次は「旅行先の父に送る手紙」、次は「水害見舞の文」である。内容よりいへば、註文狀には註文の品目、數量、期限、註文することばが肝要である。その一つを落しても、註文狀としての效力を失つてしまふ。第五課の註文狀には、追註文が附記してあるから、複雑になつてゐるが、取扱の時には之を二つにさいて、各獨立の註文狀とするがよい。「同じく返事」も亦同様の取扱を要す。「旅行先の父に送る手紙」は家の事情がいかにもくはしく書いてある。姉は父の出發當時には病床にあつたものらしく、常に父の心にかゝる祖父の起居をくはしく書いた所は、増太郎の心盡しが一きは

よくあらはれてゐる。「少しも御案じ下さるまじく候。」のいひまはしは、多く出ない形であるから、よく／＼取扱はなければならぬ。「水害見舞の文」は見舞狀の模範としてあげたものである。その安否を問ひあはせるのが主で、こちらの心配をあらはすことも忘れてはならぬ。見舞狀に對する返事は普通文にちかいもので、書簡文と普通文との差異を會得させるには適材である。形式方面では候文の基礎的練習をするのが、理解を正確にする上にも、綴り方教授の上にも肝要なことである。余は之を特に「候しらべ」といつてゐる。候文の他の文と異なる所は、「候」といふ語の有無によるといつてもよい。「候」には「切れる候」のつかひさまと、「續く候」のつかひさまとがある。之を會得したら、候文の基礎は十中八九定まつたものである。故に候文の取扱は通讀・意義・書取の外に「候しらべ」の一作業をさしはさまなければならぬ。「候しらべ」が終ると、その箇所を口譯、應用等をも課するのである。世に候文の教授を甚だ困難なやうにいふが、読み方教授に於てこの基礎的方面に力を注いだら、兒童の發動的學習態度は自分の力に相當した候文を組立てずにはあらぬ。



## 第十一章 尋常六學年

尋六の児童

尋常六學年は義務教育完了の年である。自分でも尋常小學校の最高級であると思ふ誇か、身にかゝる事は自ら之を判断し、決行して、多少自立自營の傾を持つて来る。自分の小使錢を貯蓄して、新刊書を求めるやうなこともする。雑誌店の前に立つて、雑誌を読むやうなこともおぼえる。漸く人情を解し、世間の義理もわかきまへる年頃であるから、今までさ程に感じなかつた文章に、深く／＼感じる様になる。要するに讀書の趣味が深く、かつこまやかになつて来る。尋六の児童は總べてが大人びて、學力の進歩も著しいものがある。まことに世話がひのあるを強く感じるのはこの學年である。

教材

尋六の教材を通覽すると、色々な感想がうかぶ。義務教育を完了して、社會の手に渡さねばならぬ児童のために、「平和なる村」とか「自治の精神」とか、「帝國議會」とかが採つてある。女子の爲に、「料理」だの、「主婦の務」だのといふのがある。分らぬ迄も、知らせて置かなくては心許ないといふ材料がある。この外にもなほ同じ色彩を帯びたもの見えぬでもない。要するに児童の日常生活とは縁のきはめて遠いものがある。したがつて圓滿なる理解を得させる事は容易ではないが、その困難は児童の努力が之を償うて餘りがある。若し児童の發動的努力が旺盛でなかつたら、内容形式共に困難であると評するが至當であらう。

教授の準備

余は尋常五六學年の讀本を四度繰返して取扱つた。最初の年などは、その下讀に餘程の時間をかけたにもかゝらず、安心して取扱ふまでの自信は得られなかつた。要するにむづかしかつた。四年目になつて、教

辭書

材が自己と融合するやうに感じた。他人の文章を児童に傳へてゐるのであるが、時には我が物のやうに感じた事もあつた。自分の讀んでゐる氣分通りに、児童の感じたのを認めたこともあつた。尙かに四年の經驗の賜だと思つてゐる。尋六の讀本を融通無碍に取扱ふには、餘程綿密な下調をしなければならぬ。余はそれほどにむづかしと思ふ。讀者請ふ誤解する勿れ、文字をむづかしいといふのではない。語句の意義を解し難いといふのではない。ただ教材即我、我即教材といふ感が得難いのである。高學年に進んでは、必ずしも尋六に限る事ではないが、教師の綿密な下調がいかに教授におくゆかしい色を添へるかは殆ど疑ふ餘地がない。

尋六の讀み方教授に辭書があれば、便宜を得ることが多い。文字語句の不審は悉く之に質して、大部分教師の手を要しないまですることが出来る。こゝに於て讀み方教授の作業は、まとまつた意義の朦朧たる所を明確にし、児童の解する所を照合して、眞意義を研究する外には出ぬ。世にはこの力の經濟に着眼せずして、尋六になつても、高等科になつても、漢字の筆順を毎時間説明したり、下學年で幾回か説明した語句を諄々として繰返すやうな事をしてゐる。教授の反復叮嚀なのは、時に發動的學習の元氣を枯渴せしむることがある。吾人はつとめて児童の自學を奨励し、教師は児童の自學し能はざる所を指導するやうに工夫しなければならぬ。

復習をかねたる教授

児童は嘗て學びたる語句・文章を忘却して、恰も新出のやうに質問することが往々ある。かゝる場合には之を説明するよりも、さきに教授した箇所を思ひ起させ、それを推して、こゝの意義を會得させるがよい。たとへば十一の卷の「車と船」の課に「誰か人智の進歩の大なるに驚かざらん。」といふのがある。若し心なき児童が之について質問した時には、九の卷の「靖國神社」の所に、「誰かは義勇奉公の心を起さざらん。」



十の巻「大和巡り」の所に「こゝにまうづるもの誰かはそのかみをおもひ出でて、皇室の御威徳を仰がざらん。」といふを思ひ起させる類である。この事は一面には復習となり、法則を歸納するたよりとなり、かつは勞せずして意義を會得せしむることにもなる。かゝる方法によれば、高學年に進みても、新教授の箇所はきはめて僅少になつて、教授時間に餘裕を生じ、眞に新出の箇所に対しての取扱は、親切に之を行ふことが出来る。これ復習と教授をかねた有效な取扱である譯である。

尋六の教授方針を一言すれば、讀む、書く、正確なる理解、及び含蓄の箇所等の兒童の力に開拓し得る部分は、之を自學に任せ、自學にかなぬ部分を指導するを主なる仕事としなければならぬ。しかし通讀を不用といふのではない。兒童の一讀、教師の一讀は、之によつて文の意義がいかがかり明瞭になるかを驗する位のものである。書くといふことも亦之を不用といふのではない。どれほど美しく正確に書き得るやうになつたかを驗する位のものである。理解・趣味等も之を解し、之を味はへ得た所を驗して、足らざるを補ふ位のものである。内容に關してもなるべく教材を供給して、自ら調査研究するやうに仕向けるがよい。徒らに注入これ事とするやうな教授は、尋六の兒童をして、將來大なる發展をなさしむるに少からぬ障礙をなすものである。

例によつて讀本の各課について思ひ浮ぶまゝを記してみよう。韻文には「我は海の子」「出征兵士」「同胞すべて六千萬」「鎌倉」「國産の歌」がある。余が取扱つて面白く感じたのは「我は海の子」と「鎌倉」であつた。「我は海の子」の歌には満足の氣分が漲つてをる。海事思想養成のためになど説くものがあるけれども、余はその分に安んずるうはしい心を歌つたものと思ふ。この安心の上に海をながめてこそ、それ

## 韻文

が眞の海事思想である。「海」と「海の子」とが融合一に歸した所から、我が國の海國である眞の幸福が解せられる。氷山・龍巻もこれ我が友、大船を乗出して、海の富を拾ひ、軍艦に乗組み、海の國を守るも海の子の眞に行くべき道として解することが出来る。「鎌倉」の歌の中心は、「歴史は長き七百年、興亡すべて夢に似て、英雄墓はこけむしぬ。」といふ一節にあると思ふ。稻村ヶ崎に戦勝をいのかつた新田義貞は、鎌倉に於ての成功者である。しかし榮枯盛衰の數にもれぬ。長谷の觀音、大佛も、建立當時の信仰は今果していか。思ひ出多き由比の濱、鶴が岡八幡宮今は源氏・北條の盛なりし頃の影もなからう。公曉が北條にたばかられて、血で血を洗ふ悲劇も悲惨ではないか。若宮堂の舞の袖は、骨肉相食むの殘忍をあらさまに示したも。まして大塔の宮の御事をしのび奉りては、河水の逆に流るゝ世のいかにも詮方がない。あはれ鎌倉七百年の歴史は夢、源氏は終に三代しか續かぬ。建長・圓覺といふ寺の名に一切空の感がまづ湧く。鎌倉に變らぬものはこの山門の松風のみ、人生の興亡も亦夢である。余はこの韻文をかく讀んだが、或は曲解かも知らぬ。然し讀む者の解する所が、その者にとつて文の眞意義であると主張する余には、この解釋は余のみ眞意義である。どう見ても、「歴史は長き」の一節が、この韻文のかなめで、他は悉く之に結びつけられてゐる扇の骨である。「國産の歌」は歌とは何ぞといふ問題を解決して後に議すべきもの。「同胞すべて六千萬」も心強しといふ感よりも、智解がさきにたつ。「出征兵士」もよい歌ではあらうが、三番の弟の所に來て、一番二番で得た感想が亂れるやうに思ふ。余は切に韻文は「我は海の子」のやうに、「鎌倉」のやうにありたいと思ふ。

理科的教材としては「蜜蜂」「アラビヤ馬」「鶉飼」「蟲の農工業」「動物と植物の關係」「獸類の移住」といふの



がある。「利用厚生」の眼に映じたものは「蜜蜂」「アラビヤ馬」「鶉飼」で、自然界に意味を付してながめたものは「蟲の農工業」「動物と植物の關係」「獸類の移住」である。しかし人間が動物の性情を利用助長したといふ點から見れば、いづれも自然の大法則を會得するたよりでないものはない。「蜜蜂」の課では、一群の組織、その任務、群中の制裁、同類の蕃殖、敵對行動等を知らせ、國家組織と對照して、下等動物の本能と甚だ似通へる所あることを悟らせなければならぬ。「アラビヤ馬」の課はアラビヤに産する馬がいかに良馬であるかを知らせるが眼目で、その達者なことを示すに、トルコの大將が三千圓で買った話をあげ、これほどに良馬を産する様になつた原因を、家人の愛育に歸して、旅行日記があげてある。この新しい説明文を取扱ふには、最後は説明に歸結しなければならぬが、その過程として、トルコの大將と馬主との心的交渉を取扱はなければならぬ。「馬主はしばらく大將の顔を見つめてゐたが、靜かに其の金を拾ひ上げ、馬の耳に口を寄せて、何事か話してゐるかと思ふと、ひらりと飛乗つて、一散にかけ出した」とある。馬に耳語した所が、以下、馬主の行動を説明する焦點である。「こんな馬鹿大將には、お前の力を見せてやるより仕方がない。御苦労だが、そこまで一走り頼むよ」とかの耳語を解すると、アラビヤ人は後をふりかへり、以下の行動が、すべて、トルコ人の蒙を啓く方便であるやうに見える。したがつて「閣下、三千金が惜しう御座いますか、此の馬が欲しう御座いますか」といふ馬主の心事も明かになる。「鶉飼」は岐阜の名物で、おもしろしと見た半面に、人間が自然を巧妙に利用することを知らせなければならぬ。「蟲の農工業」は人間生活の現象を、蟲の生活中に認めた所に、「動物と植物の關係」は動植物の各個體相互が自然の法則に支配せられてその生を全うする所に、「獸類の移住」は動物行動の原動力が、食物であるといふ所に、人生の意義を解釋

する理科として尊い所がある。「獸類の移住」の課に、「又かつて栗鼠の大群ウラル山中の一都會に現れしが一隊又一隊、續々相次ぎ、三日三夜引きも切らず、人々の驚き恐れて逃げかくるゝ中町を過ぎ、屋根を傳ひ窓を抜け、座敷を横ぎり、何れも南より北へ、同一の進路を取りて、山あれば越え、河あれば泳ぎ、道に當るもの、一として之をさまたぐるこ能はざりきといふ」がある。蓋し尋六までの讀本中最も複雑な文であらう。

## 地理教材

地理の「吉野山」「瀬戸内海」「臺灣より樺太へ」「樺太より臺灣へ」「瀑布」「朝鮮の風俗」「阿蘇山」「南滿洲鐵道」「歐羅巴の大部」は内地の名所から新領土、それより海外の都市に及んでゐる。すべて地理的記載は郷土の智識で、之を理解し得たる所を再び郷土にもたらし、比較するといふ事を忘れてはならぬ。かくして始めて正確に解し得る部分と解し難い部分とが明確になる。地理的記載の中にも、「吉野山」「瀬戸内海」「瀑布」等は名所遊覽の趣味を主とし、他は智識を主とした教材である。

## 歴史逸話

歴史逸話として見るべき材料には、「兒島高德」「熊王丸」「日本海々戰」「鳥居勝商」「少年鼓手」「畫工の苦心」「公事と私事」「コロンブス」「辻音楽」「烈士喜劍」「諸葛孔明」「孔子と孟子」等がある。この種の材料が多くなつたのは、地理・歴史・理科が獨立して、讀み方は主として文學方面を擔當するやうになつたからであらうか。まとめて歴史逸話としては見るけれども、その色彩はいづれもちがふ。「兒島高德」は落日の皇運を挽回しようといふ忠臣の至情がその生命であり、「鳥居勝商」は一城の存廢を一身になつて、重圍の中を出て使命を果して、つひに一身を棄てたといふが骨子である。「熊王丸」は君父の仇を報ぜんとして、九歳の幼童が、七年間楠正儀をつけねらつたが、その恩愛に双向ふ又なく、義理と恩愛の板狭みとなつて、而も



その身を捨つるといふ所に自己の生命を發見したが、人々が許さないため、世を捨て、往生院に入つて僧となつたといふ、けなげにうるはしい話である。「少年鼓手」はアルプの山の雪なだれにはらひ落されて、その谷底に朽つべかりしを、マクドナル將軍のために助けられたといふうるはしい話。少年鼓手が白雪皚々たる谷間に、死に行くに臨んで、進軍の調をうつたのは、熊王丸が一命を捨てて、行くべき道を進まうとしたのと甚だ似通つた所がある。マクドナル將軍の愛情にビエールの助かつた事によつて、部下が悉くこの將軍の傍に死なうと決心してゐた事も察せられる。まことに名將軍の美譚である。「日本海の新海戦」は皇國興廢のかゝる所、國民敵愾心の最高潮に達したる所、その戦況の盛には國民が一身を賭する思でその結果如何を見つめてゐたのである。この大捷の奇蹟を、東郷大將は 天皇陛下の御稜威と歴代神靈の加護に歸せしめられたる所、國民性の麗はしき發露として眞に尊く思ふ。この課固より史實として尊いのであるが、國民性の發露として通讀すると、實に涙の禁じ難いものがある。「畫工の苦心」は道を樂しむものの心事が、俗事を超越して、その道以外に何物もないことをあらはしたるもの。「辻音楽」は音楽を生命とするアレキサンダー・ブーシェーが同情の光の前におのが至極の藝術を投げ出したるはしさである。藝術家に銅臭高き現代には、ことに尊い話であると思ふ。「公事と私事」は修養ある者の心事に、餘裕あることを示したもので、處世の難關は多くこの公私を混同することより生ずるものである。處世訓として尊いものであると思ふ。「コロンブス」は勿論冒険家の模範であるが、余はそれよりも信念の前には何物もその力を失ふといふことに尊い意義があると思ふ。一時船員が殆どコロンブスに反抗して、彼を海中に投じて歸航する事を企てたが、多人数が合同して、而も一コロンブスを投げ得なかつたのは、力の不足ではない、コロンブスの熱烈なる信仰の

前に、船員の力が失せてしまつたのである。余はこの課を通讀する毎に、冒険家としてのコロンブスよりも偉大の力を有するコロンブスを尊く思ふ。この力がかの大冒険を成功せしめたのである。「烈士喜劍」は武士道の華で、責任感のきはめて強い一例である。喜劍の屠腹は喜劍にとつて至極の満足である。他人の知ると知らぬは喜劍には問題ではない。明け暮れに心の呵責にあふより、身を殺して心の稱讃を得る事が満足なのである。吾人がこの奇行に等しい喜劍の行動を床しく思ふのは、蓋し亦我が一國民性であらう。「諸葛孔明」は誠忠類稀なる所が我が國民性に一致する點、従つて、我が國民教育の資料として價値ある所、同時に「之を中外に施して悖らず」と仰せられた大御言葉も思ひ出でられて、殊に尊く思ふ。「孔子と孟子」はその道が我が國に傳はつて我が國民の行爲を律してゐる。是等に縁をもつて、茲に採用せられたものと思ふ。單に孔子の逸話、孟子の逸話を知らせる事が目的ではない。教授者はこの根本義を考へて取扱はねばならぬ。常識啓培の材料としては「車と船」「我が海軍」「分業」「笑」「料理」「時間」「紡績」「物の價」「造船の話」「天氣豫報及び暴風警報」「我が國の農業」「貿易」等である。こゝには地方の狀況によつて、輕重を附すべき材料が多い。しかしどの課でも兒童の日常生活を填充して、余の見たる分業とか、余の考ふる笑とかいふ題として理解せしめなければならぬ。

學校落成式は自治團體の公共造物が落成したる意として、自治團體の協同一致を知らせる材料とも見られるが、編者の意見は式事文を之によつて知らせようといふのであらう。式事文は讀本中こゝにのみ現はれてゐるので、之によつてその作法までも説かねばならぬ。式事文は多く一、參列の光榮、二、過去現在未來三、結尾の語といふやうになつてゐる。「こゝに本校新築落成式を舉行せらるるに當り、其の席末に列する



を得たるは、余の最も光榮とする所なり。(以上參列の光榮)そも明治五年學制發布以來、教育の普及發達は年を追うて愈々盛に、今や全國の就學兒童は學齡兒童の百分の九十七を越え、本郡の如きは實に百分の九十九の好成績を示せり。随つて學齡兒童の數は年々増加して、學校の増設を見る事は日一日より急なり(過去)今本町民諸君の熱心により、茲に新校舎の落成を見るに至れるは、國民教育の一慶事といふべし。本校舎の建築は質素堅固を主とし外觀美ならざれども、通風・採光二つながら其のよろしきを得、専ら教授の便を計り、實用に重きを置き、其の注意の周到なる、縣下まれに見る所なるべし。(現在)將來本校に學ぶ者の幸福如何ぞや。(未來)謹んで一言をのべて祝意を表す。(結尾)これ等を指導して、この學年を終るまでに、卒業式の祝辭と答辭を書かせて見るやうにしなければならぬ。

「自治の精神」と「帝國議會」は國民の知らなければならぬ法制上の智識である。しかし尋六の兒童が何處まで解し得るかは問題である。教授者はこれを解せしむるに適切卑近なる材料を、その居住してゐる土地に求め、之をたどつて、兒童相當の理解を得しめなければならぬ。

女子のために「日本の女子」と「主婦の務」があげてある。前者は主としてその志操に關してのべ、後者は主として家事日常の業務について述べてある。「日本の女子」は修身・歴史・讀み方で學んだ女子、即ち上毛野形名の妻、瓜生保の母、孝女お房、稻生恒軒の妻、松下禪尼、鈴木今右衛門の妻、山内一豊の妻、楠木正行の母、水兵の母等をあげて最後の一段に女子の守るべき道が説いてゐる。「主婦の務」は日常卑近な行爲があげてあるが、卑近な所に修養の眞髓の存することを知らねばならぬ。主婦の務を堅實に實行し得た者にして、はじめて日本女子の志操を確守することが出来るのである。

自治の精神  
と帝國議會

## 女子の材料

## 修養に關するもの

「平和なる村」「大國民の品格」「苦樂」等は修養に關する課として意義が深いと思ふ。ある平和なる村について詳細なる記載がしてあるが、假作か實際にあるのかは疑はしい。この課を教授しては「何をか平和といふ。」ことに觸れなければならぬ。一村の平和は一家の平和之をうみ、一家の平和は一人の平和之をうむのである。よしこの課の記載事項にもれても、平和なる村は成立し得るのである。こゝまで取扱つて、はじめに編者の要求に合するものと思ふ。「大國民の品格」も亦之と同じである。こゝには公德・禮儀・遵法・度量等がその品格の主なるものとしてあげてある。しかしこれ等は大國民ならずとも、單に人としても守るべきことである。この課を教授するには、我が國民の不注意から來てをる惡風を合せて取扱ふが大切である。

「苦樂」の課の内容は苦樂を超越したものにはじめて解せらるゝもので、思想の程度が頗る高い。何處までも兒童の日常生活に結びつけて、その力に叶ふだけを解せしむるがよい。たとへば遠足の時うまい辨當を食はうと思ふならば、道中の間食を廢せなければならぬといふ類である。

皇室の御事に關しては「明治天皇の御製」「軍人に賜はりたる勅諭」「國民の至情」が出てをる。難解の語句が多いから、それは叮嚀に取扱つても、「御製」又は「勅諭」を拜讀することは他の單に理解を目的とする文章と異なり、すべて敬虔の念にみちて拜讀しなければならぬ。

## 皇室の御事



## 第十一章 高等科

高等科

余は高等科の教育について、経験が頗る乏しい。ことに余が過去二年間擔當した高等一年生は、一人として中學の入學志望でない者はない。されば高等科とはいへ、その實は中學の豫備校である。決して現行法令の要求するがやうな高等科ではなかつた。蓋し都市に於ける高等小學校は、中學敗殘者の收容所のやうな色彩を帯びてゐるのではあるまいかと思ふ。かゝる高等一年生を二箇年教授したといふ經驗は、普通の高等小學校の教授研究の資料としては甚だ薄弱である。故に余はこの章を省かうかとも考へたが、薄弱な研究資料の上にも、なほ之に相應する研究は存在する譯であるから、殆ど豫案にちかい意見を開陳することとした。

高等科の兒童は學習態度がはなはだ緊張したものである。學習にはらふ努力をけつして惜しむものではない。蓋し教材の大部分は獨力で解し得るといふ自信がその因をなし、己が爲に學ぶといふ氣風がその縁をなして、緊張した氣分と努力を惜しまぬ態度とをきづきあげたものであらう。故に教授の箇所に對しての注意は勿論、參考資料を提供した際にも、忠實に之を調査研究して、教授者に快感を與へる。これらは兒童が殊更に之を行ふのではなくて、發動的の學習態度がこゝに至らしめるのである。余は前章尋常六學年の所に世話がひのある學年だといつたが、高等科の兒童は、共に研究を楽しむ友として、利益を得る事が決して少くない。余は常にかういふ事を感じた。吾人は何事によらず既に先覺の研究を盲信して、之に捕へられた傾があるが、高等科の兒童は分らぬから疑ふのである。故にその疑は眞の疑で、吾人にとつて意想外のものが多い。

高等科の兒童

教師の態度

負うた兒に教へられて淺瀬を渡る事が度々あつた。故に余は高等科の兒童を、一面に教へ見ると共に、一面に研究の好同伴と見るべきものと思ふ。

余は従來高等科の兒童の強き信頼をつなぎ得た教師の態度を見るに、多くは知らぬ事を知らぬときつぱり言ひ得る人であつた。研究の淺深といふことよりも、向上の念の強い人であつた。これらを綜合して考ふるに、知らぬ事を知らぬといひ得る人の知つてゐることは、慥に知つてゐるのである。即ち「知らぬ」と明言するのは、「知る」ことの確實な證明である。衷心より知らぬ事を知らぬといふことは、心中常に光風霽月の人でなければならぬ。研究の念強く、學力深遠な教師ならば、これに上こすものはないが、若しその二者に多少の甲乙があるとしたら、學力の深遠よりも、研究心の旺盛な方が尊い。けだし兒童の本能たる向上發展を楽しむ性情と調和するからであらう。されば高等科を擔當する教師は、兒童を研究の好同伴と見て、自らは一日の長を以て任ずるがよい。苟も自己の弱點を教權によつて覆ふやうなことがあつたら、その結果は教育の權能を根本的に破棄する事となる。

教材

高等科の教材を通讀すると文字・語句・文の關係・言ひ廻し等のむづかしくなつたのがあるが、部分的には自習の叶はぬといふ材料は少いと思ふ。内容については手ほどきを要するものと要しないものがあり、形式については特に讀み味はうべき部分の指導を要するものと要しないものがある。例へば、修養に關する「眞の知己」「盗人をいましむ」「護國の眼と腕」「スパルタ武士」「興國の民」、法制經濟に關する「會社」「資本」「保險」「統計」「産業組合」「關稅」「法律命令」、社會に關する「天然の紀念物」「服裝」「神社」「古社寺と國寶」「源平藤橘」、宗教に關する「釋迦」、之に類する「ベスタロッチ」「愛」、天才として「月光の曲」、その他漢



詩・和歌・俳句・朗詠等は内容上の手ほどきを要するもの。形式方面の指導を要するものは軍記物・謡曲等の文である。

## 補充材料

補充材料としては、近來中等學校の副教科書として發行せらるる常山記談抄、日本外史抄等の如き纏つたものと日々の新聞紙等がよいと思ふ。日々の新聞紙は論説・雜報・文藝・實業・廣告等、いづれも活教材である。分量からいつても、長きあり、短きあり、難解のものあり、容易なるあり、個性に應じてその好む所を讀破する便利がある。内容についても、政治・宗教・教育をはじめ、文藝・實業・發明等、社會萬般のことが網羅されてをるがために、これまたその好む所を讀破する便利がある。たゞ淫猥なる三面記事は、軟弱なる兒童の思想に害毒を及ぼすことなきかが問題である。勿論多少の害毒は流すことがあらうけれども、教育者が之に適當の指導を與ふれば、却つて之を利用する道のないでもない。之を放任して兒童の通讀にまかせてゐる現今の家庭又は社會の状態に比較しては、教師の指導によつて、正しき讀み方を會得せしむるのはどれほど害毒の防止に効果があるかしれぬ。

## 教授方針

高等科の教授方針として、通讀・語義の解釋などはなるべく兒童の自學にまかせ、研究の端緒を開發すべき材料は、事實を兒童の日常生活に採つて、その眞義を十分に會得させなければならぬ。随つて通讀と語義の不審を質して解釋の出来る材料は、通讀・意義・注意すべき箇所を取扱位で他に及ばないものがある譯である。即ち重きは極めて重く、輕きはきはめて輕き取扱にとどめるのである。さはいへ正確なる理解及び含蓄等もすぐれて困難なものがある。一の卷「四季の月」の所に「春は景色や」とのふ梅の時節よりも、櫻の花盛りなる程照りもせず、曇りも果てぬおぼる月夜にこそ、一刻千金の價はあれ。」といふ文がある。これに

含まれてゐる意義と、文との關係は中々むづかしい。それが明確になつてゐないと、兒童の前に立つて、多少の動搖は免れない。「春は景色や」とのふ梅の時節よりも」といふ句の背景には、「春もや」と景色ととのふ月と梅。」といふ芭蕉の句が聞かせてある。「照りもせず、曇りも果てぬおぼる月夜にこそ」といふ句の背景には、「照りもせず、曇りも果てぬ春の夜のおぼる月夜にしくものぞなき。」といふ大江千里の歌がにほはせてある。「一刻千金の價はあれ。」といふ句には、蘇東坡の「春宵一刻直千金、花有清香月有陰、歌管樓臺人寂寂、鞦韆院落夜沈々」といふ詩を思はせてある。この種の文はたゞ文字通りに解しても面白いが、この背景を解するに至つて、含蓄の頗る豊富な事を感じる。高等科の讀本中にはこの筆の施してある所が多い。「故郷」の終に、「骨を埋むる何ぞ墳墓の地のみならんや。人間到る處青山あり。」と引用の意をあらはさないで、たゞ文として、書いてある。これだけ出してあつても、「男兒立志出鄉關、學若無成死不還。」といふ起承の句を思はねばならぬ。熱帯地方の果樹の所にすら、「特に周り二尺にも餘るザボンの、幾百となく鈴なりになれるさまを見ては、よしや橘の枳に化す例はありとも、一樹を移し植ゑんと思はぬ人はなかるべし」とある晏子春秋に「晏子曰、嬰聞之、橘生淮南、則爲橘、生淮北、則爲枳、葉徒相似、其實味不同所以然者何、水土異也」とあるを引用したのである。國語教授が故事證議に終るやうでは徒らに考證・穿鑿の惡風を助長し普通教育に於ける國語教授の眞義を逸するおそれがあるが、内容を豊富にする一工夫として、この種のもの存することを知らせなければならぬ。さらに文の關係は「春は梅の時節よりも、櫻の花盛りの頃のおぼる月夜に、一刻千金の價がある。」といふ簡單な形に引きなほして見ると、文義が明かになる。かゝる難解の材料に遭遇しては、研究の端緒を充分に指導しなければならぬ。



修養に關する材料

修養に關する材料、即ち「眞の知己」のピチウスとダモンの關係が、互に相信することが生死の外に超越してゐること、「盗人をいましむ」の陳寔は支那式だが、藤原保昌が袴垂を壓して、策の施すべき道なからしめた膽、これまた生死を越えての離れ業である。まして「護國の眼と腕」の奇蹟に等しい事、「スバルタ武士」の死を見ること歸するが如きこと、「興國の民」の進取の氣象の根本が那邊に存するかなどは、悉く修養上の問題で、知つただけでは何等の價値もなきものである。

法制經濟社會的材料

法制經濟に關する材料は、兒童の生活とは甚だ縁遠い。しかし「會社」「資本」「保險」をはじめ「統計」「産業組合」等に至るまで、兒童の生活範圍に絶無ではない。之を便りとして我が事のやうに學習せしめなければならぬ。吾人は我が身邊にきはめて古き歴史的事物の存在することを知らぬ。机上にある一枝の筆、一本のペン、墨と墨汁、インキ等、皆その傳來の歴史を有せざるものはない。天然の記念物としての大樹、珍らしき禽獸蟲魚、さらに吾人の服裝（住居食物）神社（古社寺と國寶）姓氏等、皆宇宙と共に、國と共に、身と共に存するものである。こゝに目がついて來ると、吾人の日常生活がきはめて意味の深いものとなり、身邊に圍繞するもの悉く研究の資料でないものはない。

宗教に關する材料

宗教に關するものには「釋迦」といふ教材がある。これ等はすぐれた得道者でなければ、満足に取扱ふことが出來ない。文章は讀むことが出來ても、意義を解することが出來ても釋迦の教義を悟る事は出來ない。要するにこれ等の教材は、教授者に信仰の有るか無いか根本問題で、到底語句の末から尋ねはいらうとしても不可能である。ペスタロツチも之を傳記として説く事は容易であるが、その精神は教育の眞意義をさつたものの外は説くことが出來ぬ。まして「愛」の課を取扱つて、愛の何たるかが分るまでには、教師がま

天才としての材料

文藝的材料

づ徹底した愛を解しなければならぬ。これ等の教材になると、文字語句をはなれて、その身が釋迦とかよひペスタロツチと通ひ、愛の本體を握るやうに會得させなければならぬ。

天才としてはペーローペンの月光の曲が出してある。天才の心事は到底凡人のはかり知る所でないが、天才が神來の感にみちてその技量を發揮する時は、蓋しかやうであらうと想像するに過ぎぬ。兒童の日常生活にも、説話として、又行爲として、之に觸れる事實は多いから、人は皆多少天才の傾向をもつてゐる事を知らせ、天才と凡人の間には、幾百十級の階級ある事も知らせるがよい。

漢詩は一課として獨立してはゐないが、他の文章に附帶してあらはれてをる。萬里の長城にも「不知禍起蕭牆内、虚築防胡萬里城。」（轉結）——祖舜宗堯自太平、秦皇何事苦蒼生（起承）——又「焉知萬里連雲勢、不及堯階三尺高。」（轉結）——秦築長城比鐵半、蕃戎不敢過臨洮（起承）といふのが出てゐるが、短い語句の中に豊富な意義を宿してをる。これ等は讀んで大體の意義を解するまでに取扱へばよい。和歌・俳句が「四季の月」「雪」「ほととぎす」「詠史十首」等に現はれてゐるが、これ等はその意義を明かにすると共に、「五七五」又は「五七五七七」と語句をならべて、感想をあらはすことも試みさせるがよい。「朗詠」はむかし之を朗詠して楽しんだものであるが、今は全くすたれた。余は新聞にあらはるゝ文藝物を鑑賞するやうになるといふ事は、國民としての生活を幸福ならしむる所以であると主張してゐる。新聞文藝とは小説・新體詩・俚諺・和歌・俳句・狂歌・川柳・語呂・謎・漢詩等である。毎日の新聞紙に掲載せらるゝこれ等文藝物を、一讀大體の意義を解し得ると否とは、少時間別天地に遊ぶ樂みを得ると否との差である。高等科の國語教授をうけたほどの者は、これ等の幸福を得させたいものと余は切に思ふ。



高等科の讀本

高等讀本中には「侍賢門の戦」「小袖會我」「鉢木」「大原御幸」「古武士の意氣」等がある。小袖會我と鉢木は謡曲より、他は軍記物より採つた材料である。保元・平治・平家・源平盛衰記・太平記等はうるはしい國民性のあらはれた讀物として、國民がいつになつても讀誦を廢し難いもの、謡曲は上流國民の誦ひ物として、我が國民の趣味に合するものである。これ等は兒童の視聽に觸れる機会が多いから、之を縁として尊い國民性を助長しようために、編者の特に採用せられたものと思ふ。故に之を取扱ふには、兒童の日常生活の中に之を解する緒を求めて、文學としては鎌倉・室町のものであるが、解するには之を大正の兒童生活に結びつけねばならぬ。余の尙かにうらみに思ふのは、兒童の視聽に親しい淨瑠璃の疎外された事である。蓋し戀愛を生命としたものの多いがためであらうけれど、我が國民性の美點の遺憾なく現はれてゐるものも少くない。余は淨瑠璃のためにいたく之ををしむ。形式方面に軍記・謡曲特有の形がある。注意して取扱はねばならぬ。余は高等讀本の四までを通讀して、一種の感想にうたれた。それは教材として採られた範圍が、時間に互り、空間に互つて、極めて廣い事である。かつ人生問題の奥深い所に觸れた深遠な思想の存在することである。余は尙かにこれ等教材が余の力によつて遺憾なく教授し得るかと反省した時、強烈なる苦悶を感じた。吾人は讀本の研究を終生の題目としても、到底これで十分といふ時はあるまい。之を中心として參考書を繕き之を中心として沈思黙考を続け、多少明るい天地を發見した時が、即ち余がいくらか人になつた時と思ふ。誰か初等教育者を容易の職業といふ。試に讀本十六卷を繕いて、教師まづ自己を讀み、兒童をして自己を讀ましめよ。これが何で容易な業であらう。



昭和十四年六月二十三日印刷  
昭和十四年六月三十日發行

讀み方教授

定價金 壹圓

(送料十錢)

不許複製

著 者

芦 田 惠 之 助

發 行 者

芦 田 伸 三

印 刷 者

菅 生 定 祥

印 刷 所

東京市神田區錦町三丁目二番地  
協 榮 印 刷 所

發行所

東京市神田區鍛冶町三ノ六鍋町ビル内  
振替口座東京一七八七二番

同志同行社

大 取 次 所

東 京 林 平 書 店

大 阪 柳 原 書 店



芦田惠之助著 (大好評)

全卷完成

小學國語讀本と教壇

定價

卷一・二	各	七〇
卷三・四	各	九〇
卷五・六	各	一〇〇
卷七・八	各	一〇〇
卷九	一	一〇〇
卷十	一	一〇〇
卷十一	一	一〇〇
卷十二	一	一〇〇

◎送料各卷共一〇

我が初等教育史上に赫々たる光を輝かして生れ出た小學國語讀本は昨秋其の完成を見た、之こそ實に國家的の大偉業である。

しかし之をして眞に偉業たらしめるものは小學校の教壇上に於ける日々<sup>の</sup>運用如何にある。此の國家非常時に於ける小學教育者の第一のつとめは此の尊い教材を基として國民精神の根本を幼い魂の中にしつかり植ゑつける事である。四十餘年の生涯中の大部を教壇上に暮した著者は國家に對する最後の御奉公として新讀本を眞に生かす工夫を過去六年間眞剣にこらした。其の成果が此の全十二卷の「小學國語讀本と教壇」である。

此の書こそ表面の文字上の解釋にのみ終止した多くの解説書と全然類を異にしてゐる。國家を小學校の國語教育によつて救はんとする烈々たる著者の魂が至る處ににじみ出た、まことの教壇の姿を如實にあらはしたものである。長年に亘る著者の涙ぐまきまでに眞剣な體驗と國心培養の心底から翼ふ著者の眞實心が此の十二卷の教壇を通して特色である。

同志たると否とを問はず實際家が是非此の一書を座右へ具へられん事を心から御願する。各卷の定價は卷別に明記してありますから送料加算の上御注文下さい。

發行所 東京神田區治町ルビ 同志同行社 東京林平書店 大阪原野書店 取次



395
137



終

Y 1.00